

第五回宮古島文学賞 選評

椎名 誠

第五回目となるこの宮古島文学賞はその目指す方向がある程度見えてきたようで、全体として小説の力量が高まっているように感じました。応募者も全国的な広がりを持っており、作品のジャンルもその気配も思いがけないほど多岐にわたってきましたので、期待を高めて選考に臨むことができました。その結果、第一席の「山の女」の文学的な力量は相당한ものと思います。

「―銀游回歸―」スクが来た！」

島文学としてぬかりなく構成、表現され、島の海人（うみんちゅ）像もうまく書いている。最後のクライマックスも上手だが、表題がすでにその世界を明らかにしているので印象としてもったいないと思った。読んでいかないと表題の意味が分かりにくいのも一考を要し

ますが。

「夜行島」

インドの夜行列車の中で出会った人々と、島のことを語り合う。文章もうまい。なんとも魅力的なストーリーと状況設定だが、制約が多すぎて損をしている。

「山の女」

全編ゆるぎない文学性を持った描写力にすぐれた作品。「山の女」というより「島の女和子」の人生と山之力、山の日々をバランスよく描いている佳作である。ストーリー展開が読めない魅力、島言葉のリアリティ。一人の女とひとつの島が見事に対峙している。

「ブラックホールのほとりで」

こういう島文学もあるのか、と思わせる話の組み立てを繰り返して描いている。なかなか読ませる。まぎれもない島文学だが、高位入賞を争うときの決め手に欠けているのが残念。タイトルの特出ぶりがやや疑問。

「御嶽専門カンカリヤ」

全編島言葉によって描かれる島と神とヒトの物語。島文学ならではの作品だが、個性が強すぎるのが長所であり、難点である（島外の者にはむずかしい）、となった。

「あなたを連れていきたい」

よく読むとあまりにも都合よくストーリーが作られていて、安易に構成されている最近のテレビドラマを見ているよう。文章も情景描写もいいが、リアル感の不足はなんとも作品の質を安っぽくしている。

「おもいでにすむ」

SFとしてその舞台の描写、表現に苦勞しているのはわかるが、SFにはその小説世界に飛び込むためにある種、強引なめくらましの力のようなものが必要になる。そのへんの物足りなさが：

「金曜日のバス」

つたない思いを上手にこの作者が構築している。この人の描いている小説世界に好感を持つが、やはりもう少し強引なぐらいの力強さ

を持ってくらいついていかないと小説世界に
読者を取り込むのは難しい。